

発表題目：アーカイブは自文化理解に変容を迫るか
—オンライン時代の武術愛好者たちに見るインドネシアの国民意識と民族のとらえ方—

所属：国立民族学博物館・外来研究員

氏名：今村宏之

1200 字程度で発表内容を記載してください。

人類学や民族音楽学では、2000 年頃から、インドネシアでブンチャック・シラットと一般に総称される種々雑多な武術を研究対象と見なしはじめた。今のところ、議論の中心は、政府公認の全国組織によって推し進められた国民統合のためのスポーツ化と、ローカルな稽古実践のコミュニティでの身体技法やその継承過程である。

ただ、そこでは、ブンチャック・シラットというある意味では 1970 年代に創られた範疇がどのように全国化していき、彼らが対象としたローカルな実践コミュニティがそれをどのように受容したのか、ということについては、ほぼ議論されない。民族誌は確かに蓄積されるが、ブンチャック・シラットがインドネシアという時空間に遍在するようになれるため、研究者の意図を逸脱して、政府公認の愛国的な傾向のある全国組織のブンチャック・シラット観に回収されうる状況にある。

本発表では、2000 年前後から、全国組織に依存しない連帯をつくろうとしてナショナルとローカルのはざまを右往左往しながら自力でアーカイブ調査を実施し、老師たちの歴史語りと演武映像のアーカイブ作りまで企図していた小規模な自発的結社を取り上げる。本発表の目的は、研究者の調査実践というより、フィールドで出会う他者がアーカイブ調査やオンライン・コミュニケーションを通して、彼らの自/他文化理解にどのように向き合おうとしているかを描くことにある。はざまの葛藤を描くことにより、ブンチャック・シラットのより動的な側面をとらえることができる。

インドネシアでは国民国家建設に際して、「インドネシア民族 bangsa Indonesia」とその下位集団としての「スク・バンサ suku bangsa」という単位を生み出し、大小 1,000 以上あるとされるエスニック・グループを行政制度の枠内に規定してきた。ブンチャック・シラットという語彙自体は 1970 年頃に制定されたものだが、1945 年の独立前後には、国民統合に資する文化と位置付けられ、体操やスポーツとして全国への普及が試みられてきた。管見の限りでは、グループ名や系譜で呼ばれたり、固有名詞すらなく、また武術かどうかとも一概に判断できなかつたりするようなものもローカルな文脈ではしばしばブンチャックやシラット、クンタオ、マエンボなどの俗称でよばれていたりする。ただし、世間的には空手やテコンドーをはじめとした海外武術と比べて冷ややかな視線を送られている。

本発表では、より「伝統」的と当事者がとらえるブンチャック・シラットの社会的立ち位置の向上を目指して 2009 年に設立された自発的結社タントウガン・プロジェクトに焦点を当てる。結社の構成員や仲間たちは稽古実践者でもあるが、国立公文書館に足しげく通い、王立オランダ東南アジア・カリビアン研究所関係者とコネを作り、オンライン・アーカイブを漁っていた人物もいる。最初期はインターネットの匿名掲示板で、全国からジャカルタ首都圏周辺に集まる実践者とオフラインでネットワークを作っていた。2012 年に古都ジョグジャカルタに移転した後は SNS で有能な若者をリクルートしていた。一見すると国内の他者との出会いを通じて自文化を相対視していそうに思える。実際のところ、彼らの自文化理解は史資料調査とフィールドワークを通じてより頑なになっていった。